研究課題名　小児脳腫瘍におけるradiogenomics解析の疫学研究

研究責任者名　広島大学病院脳神経外科　講師　山崎文之

研究期間　2019年2月26日(倫理委員会承認後)～2021年3月31日

対象者
1999年1月1日から2019年2月28日までに、広島大学病院にて脳腫瘍と診断され、手術を受け、病理診断が胎児性腫瘍（髄様腫など）、上衣腫、毛様細胞性星細胞腫、胚細胞性腫瘍であった患者さんになります。

有意・目的
小児脳腫瘍は病気による小児の死亡原因となる2番目の疾患で、死亡率は一番高い疾患です。小児脳腫瘍は後頭にある小脳（後頭葉、第四脳室）に最も多く発生しますが、後頭葉葉、第四脳室に髄様腫、上衣腫、毛様細胞性星細胞腫の胚細胞性腫瘍が発生し、それぞれ手術の目的が異なります。すなわち、髄様腫は遺伝子型の診断と可能な限りの摘出が必要でですが、WNT型の髄様腫は放射線や抗がん剤の感受性が高く、全摘出は必須ではないとされています。上衣腫は初回の手術で可能な限り摘出することが予後に大きく影響します。その中で、後頭葉葉のA型は、再発率が高いとされますが、後頭葉葉のB型は放射線治療後の再発率が低いことが知られています。毛様細胞性星細胞腫は、初回の手術で全摘出できなくても、予後は良好なため、障害は極力避けるべきであると考えられます。胚細胞性腫瘍はその構成成分で治療方針が異なります。これらの病理診断、遺伝子型についての情報が手術前に得られれば、治療方針の決定に重要な情報となります。

本研究は、手術摘出標本を用いた遺伝子分類と、画像情報を統合した、いわゆるradiogenomicsにより、小児脳腫瘍の正確な術前診断法の確立を目指すことを目的として行います。効率的に見分けられるようになれば臨床的意義は極めて大きいものになります。

方法
本研究は、診療録（カルテ）情報を転記して行います。また、手術摘出済みの病理標本を病理学的に追加検査します。検査するには、H3.3 K27M遺伝子変異蛋白発現、H3.3 K27me3（野生型）蛋白発現、EZH2蛋白発現となります。治療前に施行されて、データ取得済みのMRI検査から得られる所見とその後の臨床経過を診療録から転記して、統計学的に解析します。カルテから転記する内容は年齢、性別、病気の診断、血液検査結果、MRI画像のパラメーターのT2強調画像/FLAIR画像、拡散強調画像、造影所見のパラメーターを解析し、鑑別診断法の確立を目指します。

（個人が特定出来る情報は転記しません）本研究はヒトゲノムに関する研究ではありません。

共同研究機関
なし

試料・情報の管理責任者
広島大学病院　脳神経外科　講師　山崎文之

個人情報の保護について
調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。
研究に資料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生じること
いただきます。

問合せ・苦情等の窓口
〒734-8551 広島市南区霞1-2-3
Tel: 082-257-5481

研究機関：広島大学